歩いて発見。津の魅力

194 歴史散歩

国登録有形文化財 妙華寺本堂

久居元町の真宗高田派寺院の妙華寺は、寛文９(1669)年に津藩から５万石を分封された久居藩の新たな城下整備に伴い、天和元(1681)年に建立されました。久居藩の菩提寺である玉淀寺の西側に並び、共に南側を正面とする構えのお堂が建つこの一角は、市街地にあっても閑静な雰囲気を醸しています。

文政４(1821)年、「久居大火」と呼ばれる大火事で城下の多くの建物が焼失し、妙華寺もその災禍に遭いました。現在の本堂は、江戸時代後期となる安政４(1857)年に再建に着手し、文久３(1863)年に完成した160年ほどの歴史を持つ建物です。

外観の特徴として顕著なのが寄棟造りの瓦屋根で、「錣葺き」と呼ばれる葺き方の屋根が四方から望めます。「錣」とは、兜の鉢(頭に被る部分)から垂らし後頭部から首の左右を守るもので、一般的な瓦葺き屋根とは異なり、途中に段差をもつ形がそれに似ていることから錣葺きと表現されます。

この本堂は、真宗高田派本山専修寺にある御影堂の建築手法との共通点があり、同派末寺の本堂に取り入れられてきた特徴を踏襲していることに加え、錣葺きの屋根をはじめ随所に独特な外観的特徴を有しています。これらのことが評価され、平成16年に国登録有形文化財に登録されました。

さて、久居藩の出来事を伝える史料『伊勢久居藩史(藤影記)』では、妙華寺本堂は「飛行機の失敗」という逸話の舞台として登場します。

この逸話では、鳥のように空を飛びたいと思った国友某という下級藩士が、ヒヨドリを一羽捕まえて両翼と尾の重さを測り、自身の体重に比例する大きな羽を作って体に結び付け、本堂屋根の傾斜を駆け下りて飛び立とうとしました。その結果、哀れにも庭の蓮池に落下して失敗し、再度試みようとはしなかったと記されています。

幕末に再建された現在の本堂はこの逸話の時期のものではありませんが、江戸時代に自由に飛ぶ鳥に憧れて空を目指した奇譚の人物の姿を思い浮かべながら、錣葺きの屋根を眺めてみるのはいかがでしょうか。

錣葺きの屋根が特徴的な妙華寺本堂